

事業を取り巻く状況と12年続く講座の記録

― 学生達と共につくった講座 ―

藤沢市湘南台文化センターこども館 二階堂 宏範

はじめに

藤沢市湘南台文化センターこども館（以下、「こども館」という。）は、世界の民族衣装やおもちゃなどを展示している「展示ホール」、プラネタリウムがある「宇宙劇場」、様々な体験の場を提供する「ワークショップ」の三つからなる「こども」を対象にした社会教育施設であり、年間20万人程度の利用者がある。1989年（平成元年）7月18日に開館し、2011年（平成23年）4月1日に指定管理者制度に移行して2019年（令和元年）に開館30年を迎えた。運営については、筆者が所属する公益財団法人藤沢市まちづくり協会が開館当初から行っている。

本稿は、こども館のワークショップ事業を取り巻く状況を説明し、令和元年度で12年目を迎えるこども館と学生達とで取り組んできた講座について紹介する。

こども館のワークショップ事業の現在

ここで紹介する講座は、ワークショップ事業「事前申込制ワークショップ」の一つである。

こども館のワークショップ事業は、主担当の職員が一人と事務業務、展示業務、ワークショップ業務の三つを兼務している筆者の二人の職員が担当している。ワークショップ事業の実施回数は年間200講座ほど行い、講座の種類は、「出張ワークショップ」、「放課後ワークショップ」、「オープンワークショップ」、「申込制ワークショップ」の4つで構成されている。それぞれ4つの内容は、①「出張ワークショップ」が学校などの依頼で教員の研修やクラブ活動の講師として出張して行うワークショップ、②「放課後ワークショップ」がこどもの居場所作りとして平日に学校が終わった時間に実施している小学生を対象としたワークショップ、③「オープンワークショップ」が土、日、祝日や夏休みなど学校の長期休みに毎日実施し、短時間で多くのこども達が当日参加できるワークショップ（図1）、④「申込制ワークショップ」が月に1、2回程度実施し、対象と人

数を絞り時間をかけて体験する事前申込制のワークショップになっている。

平成30年度のワークショップ事業は、197講座実施して14,573人のこども達の参加があった。



図1 風鈴づくりに参加したこども

指定管理者制度への移行による事業への影響

こども館運営の歴史の中で最も大きな出来事は、指定管理者制度への移行である。教育施設には、そぐわないとの理由から一度白紙になった指定管理者制度への移行は、結果として、2011年（平成23年）4月1日に行われた。

指定管理を受けるに当たり、利用者の増加と経費の削減を求められた。

ワークショップ事業については、講座スケジュールの改変と人員削減を行った。講座スケジュールの改変は、毎週日曜日に実施していた申込制ワークショップを減らし、オープンワークショップの数を増やすことで利用者の増加を図った。既に開館日数300日中200講座ほどを実施しており、講座の数を増やすことは困難だったための講座スケジュールの改変である。人員削減は、ワークショップ事業を担当する職員二人の内一人を兼務担当にすることにより、こども館全体で人員を削減し、経費の削減につなげた。

申込制ワークショップを継続する理由

指定管理者制度の移行にともなう講座スケジュールの変更は、同年3月11日に起きた東日本大震災による原発事故の放射能問題から、室内にこどもの居場所を求める人が増えたことも重なり、大幅な利用者の増加につながった。ワークショップ事業の利用者数は、変更前の平成22年度が10,601人対し、変更後の平成23年度は、15,711人の前年対比148%になった。

申込制ワークショップを全てオープンワークショップに変えることで更に利用者は増やせる。だが、申込制ワークショップを無くさず継続する理由は、学校や家庭ではできない様々な経験とおし、時間をかけながらも、こども達自身が気づきや発見を得ながら学べる場をこども達に提供したいという運営側の思いからである。

12年目を迎える学生達と共につくった講座

申込制ワークショップは、指定管理者制度に移行してから、例年15講座程度実施しており、令和元年度についても15講座を計画して実施している。講座の特徴は、市民や企業との連携講座や神奈川県博物館協会のつながりをいかした講座など、こども館の持つノウハウを基盤として相手の特色をいかしたつくりになっている。

その一つが、令和元年度で12年目を迎える学生達と共につくった講座である。学生達とは、こども館がある湘南台駅の隣の六会日大前駅にある日本大学生物資源科学部の学生達だ。彼らとの12年の記録について、1年目を第Ⅰ期とし、2年目から9年目までを第Ⅱ期とし、10年から12年目の現在までを第Ⅲ期として記す。

第Ⅰ期 ー農業体験から農場探検へー

第Ⅰ期は、農場の魅力を探りながら、やりたいこととやれることの狭間で講座の開発を行った濃い1年であった。

2008年（平成20年）4月1日、日本大学の農場長からこども館への協力依頼から始まった。「農場の活用」「学生の学外での活躍の場」「こどもを対象とした地域に貢献できる事業の実施」を考えており、協力して欲しいとの依頼である。農場長、農場職員、農場長が声をかけた学生達と筆者で会議を繰り返し、講座の内容を話し合った。講座名は、「親子農業体験」。かつて藤沢市内で生産

が盛んに行われていたサツマイモにスポットを当て、小学生のいる10家族を対象とし、5月、6月、9月、10月及び11月のそれぞれ月1回、全5回でサツマイモを栽培する講座とした。企画から実施まで短期間だったが、各回それぞれで事前の会議、前日の準備、実施後の反省会を行い、問題の洗い出しや改善方法などを話し合い、充実した内容に磨き、参加者も満足度の高い講座になっていた。だが、10月の会議で実施回数の多さが負担であることが問題になり、年1回の講座の開発が求められた。



図2 農業体験でクワを使った作業（5月）

同年12月21日、新たな講座を実施した。農場長の発案の「もちつき大会」である。農場長は、植物資源科学科の教授であり、稲の研究者であった。その専門性をいかし、もち米とうるち米を食べてその違いを体験しながら学ぶ、ひと味違うもちつき大会を実施した。参加者は、科学的なもちつき大会を面白がり、反応も十分だった。しかし、農場内で食品を加工して食べることに對し、衛生面で問題があると後日指摘が入り、次につなげることができなくなった。

2009年（平成21年）3月15日さらに新たな講座「行ってみよう！農場探検（以下、「農場探検」という。）」を実施した。この講座の発案は、筆者である。企画は、「農場を活用でき、協力してくれる学生がいれば、植物にこだわらない。」との農場長の2008年10月の会議の発言からはじまった。

筆者は、2008年（平成20年）4月1日から、二度目の大学生として、自然科学の知識を得るためと学芸員の資格を取得するために同大学へ働きながら通っていた。学生として大学に通うこと

で学生の友達が多くできた。学生達は学内の様々な情報を筆者にくれ、農場の動物達の世話などを行うサークル「動物資源科学学術部」(以下、「学術部」という。)の存在も教えてくれた。筆者は、学術部の活動に興味を持ち、情報をくれた学生から学術部を紹介してもらい、実際に学術部の活動に参加した。

学術部の活動に参加した目的は二つ。農場で実際に活動を体験することで農場の魅力を発見すること、講座を開発する際に協力してくれる学生を探すことであった。何度も活動に参加することで、筆者が今まで送っていた生活の中にはない驚きや発見に農場で出会うことができた。また、学生達と同じ立場で活動することで学生達との関係も深まっていった。

2009年(平成21年)11月、学術部の3人の学生と筆者で農場探検の企画書を作成した。内容は、農場の中を巡り、動物達との触れ合いや農場の仕事や学べる講座である。企画書を基に農場長と協議を行い、3月に実施することが決まった。定員20人のところ申込者数は130人以上あり、若干数定員を拡大しての実施となった。学生のスタッフは、農場長が声を掛けてくれた学生の他に学術部の学生達も6人参加してくれ、終始問題なく実施することができた。



図3 農場探検で牛を見て驚く子ども

農業体験、もちつき大会、農場探検と三つの講座を実施した結果、農場と子ども館が共催して今後継続できる講座が農場探検に決まった。講座の発案が筆者であることから、講座実施における今後の中心的役割は、子ども館が担うことになった。中心的な役割を担うことから、実施根拠を明確にすること、現在の状況を把握すること、将来

のあるべき姿としての展望を認識することが必要だと思い図4を作成した。

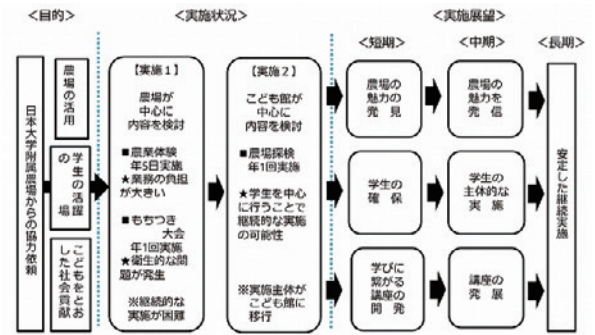


図4 当時(12年前)に作成した講座の状況と展望

第II期-1 一発展の記録一

2010年(平成22年)3月の実施2年目は、企画書を作った学生達が前年度の反省を基にコースの見直しなどを行い実施した。翌年からは、彼らの学術部の後輩に引き継がれた。興味のある部員が集まって実施する講座は、5年目を迎える2013年(平成25年)に学術部の公式行事となり、本格的な学生主体に発展した。学術部の公式行事になることで2014年(平成26年)3月の6年目には、参加する学術部の学生が20人以上になり、農場探検の定員も20人から50人に増やして一度に多くの子ども達に農場の魅力を発信することができた。2015年(平成27年)3月の7年目の学生達は、学部祭で農場探検の紹介コーナーをつくり、学内外に活動の紹介をはじめた。2017年(平成29年)3月の9年目に実施した農場探検では、農場の利用に制限があったが、農場職員と学生達が知恵をしばり、困難を乗り越えて充実した内容で実施することができた。

いずれも、学生達の自主的な発言や行動によって進めてきたものであり、第II期は、発展を続けた期間となった。農場探検の中期の実施展望としても「農場の魅力を発信」「学生の主体的な実施」「講座の発展」のあるべき姿として考えていたので、当初の想定を超える状況となった。

第II期-2 一筆者の役割一

筆者の役割は、進行管理と体験の提供である。学生達との対話を繰り返す中、講座の実施に対して負担に感じていたのは、回数だけの問題ではなく、学生生活での大きなイベント「学部祭」、

「長期休み」、「試験」の時期との重なりにもあったことに気づいた。学生達の大きなイベントを考慮した進行管理が、学生達の力を十分に発揮できると分かり、図5の農場探検の基本的なタイムスケジュールを作成した。

月	旬	内容	担当	備考
10月	上旬	学生代表者の決定 ※学生達で協議して代表者を決定する。	学生	
		学生代表者とこども館職員との打合せ ※実施概要など講座の骨子を話し合う。	学生・こども館	
		農場職員と学生代表の調整 →農場探検実施、代表者会議日程の調整を行う。	学生・農場	
	中旬	農場の施設使用の申請	こども館→農場	学祭の準備・実施
下旬	学祭に農場探検の展示コーナー設置 ※過去の写真やパネルなどを展示する。	学生		
11月	上旬			
	中旬	代表者会議 ※農場職員、学生代表、こども館職員で実施する。	農場・学生・こども館	
	下旬			
12月	上旬	学生スタッフのメンバー募集開始	学生	
	中旬			冬休み期間
	下旬			
1月	上旬	学生スタッフのメンバー決定・報告	学生→農場 学生→こども館	
	中旬			試験期間
	下旬			
2月	上旬	全体会議・現場確認 ※学生スタッフ全員の参加	農場・学生・こども館	春休み期間
	中旬	参加者の資料作成、参加者への説明をまとめる ※内容は、農場職員の確認を受ける。	学生	
	下旬			
3月	上旬	農場探検実施・反省会	農場・学生・こども館	
	中旬			

※備考については、大学生の生活に関わる内容

図5 農場探検の基本的なタイムスケジュール

10月上旬に学生とこども館とで打合せを行う理由は、学術部の学生達が代替わりの準備を行う時期だからである。学術部の学生同士の話し合いで、農場探検の引き継ぎ忘れと再度農場探検の認識を持ってもらうために行っている。学祭が終わり、新しい学術部の執行体制の下で、農場職員、学生代表、こども館の三者による代表者会議を行い基本的な内容の話し合いを行う。帰省する学生の多い冬休み期間と学生達が精神的に余裕のなくなる試験期間の12月と1月は、負担になることは避け、試験が終わった解放感と十分に時間を確保できる環境で2月から本格的に講座の準備を進め、3月に実施する流れにしている。

1年で代替わりをする学生達にとって、年に1回の講座だけの関係は、脆弱なつながりではない。学生達との距離を縮め、お互いに言いたいことが言える環境と関係をつくる必要だと思い、筆者は、休日に学生達を連れ出した。自然、人文にかかわらず様々な博物館の見学、藤沢市域で活動している藤沢メダカの学校をつくる会や大庭自然探偵団の活動、海洋研究

開発機構（JAMSTEC）や宇宙航空研究開発機構（JAXA）の最先端の研究施設の見学などに連れ出した。様々な分野のものを見聞きし、地域の活動から最先端の技術まで幅広い体験をした学生達は、視野が広がり、農場の魅力の再発見につながった。また、自分達が体験の受手側を経験することで、驚きや発見の必要性を感じ、こども達に説明する姿も変わっていった。学生達との関係は、多くの時間と様々な経験を共有することで、お互いの思いや考えが分かる強いつながりになっていった。



図6 2月の全体会議の様子

第II期-3 つながりによって-

「僕には、電話がないですけど。」筆者が学生達と関わってきた中で一番嬉しい言葉であり、学生とのつながりを強く感じた時の言葉である。

2011年（平成23年）3月24日から同月27日の4日間、こども館では、小惑星探査機「はやぶさ」の帰還カプセルの展示を行った「「はやぶさ」帰還カプセル展示～宇宙の旅☆7年のキセキ～（以下、「はやぶさ展」という。）」を実施した。筆者は、運営の担当者であり、先に実施していた相模原市立博物館と大阪市立科学館の協力を得てこども館の実施計画を2010年（平成22年）12月に作成した。来場者数の見込みは、一日2,500人であり、一日500人で混雑を感じる来場者数の5倍である。運営に必要なスタッフの数については、職員、臨時職員を総動員しても足りず、4日間でのべ70人の不足が明確になった。70人のスタッフ不足については、学生達のボランティア協力を取付けて早い段階で問題を解決できた。

しかし、超弩級の想定外が実施13日前に起きた。2011年（平成23年）3月11日東日本大震災の発生である。

震災後、はやぶさ展の実施の是非について藤沢

市とこども館で協議が行われた。震災で暗くなっている時だからこそ明るいニュースを提供したいとのことから、予定どおり実施が決定した。次に、協力を依頼していた交通安全協会と協議を行った。交通安全協会からは、計画停電の対応などで警察官の人手不足が発生して交通指導員が動員されることから、協力できないことを告げられた。交通指導員が立つ予定だった湘南台駅からこども館までの場所は、警察の指示で必ず人を配置する必要があった。

交通誘導には、藤沢市の職員が対応してくれた他に4日間でのべ32人が急遽必要になった。

32人の不足を補うため、学生達に電話を掛けた。数件掛けた後、筆者の電話が鳴り、「僕には、電話がないですけど。」と前年度の農場探検の学生代表から電話があった。緊急事態を聞きつけて電話をくれた。4年生には、卒業式や新入社員研修があることから、連絡を控えていたが、学生達が筆者の知らない所で、協力できる人呼びかけで連絡を回してくれていた。学生達の呼びかけによって32人の不足の問題は、その後2時間も掛からず解決することができた。

学生達とのつながりによって支えられたはやぶさ展は、4日間で9,874人の来館者があり、多くの人達に明るいニュースを届けることができた。



図7 早朝から「はやぶさ展」に並ぶ来館者

第Ⅲ期 ―新たななはじまり―

農場探検をはじめた当初、筆者は20代であった。当時は、10年も継続することで、農場探検は安定して実施できるものだと安易に考えてい

た。しかし、10年目の農場探検は、安定どころか実施されなかった。

2018年（平成30年）3月11日の実施に向けて2017年（平成29年）10月27日から農場職員、学生、こども館とで調整を進めていたが、同年11月22日に施設課長から農場の工事準備のため、農場探検は実施できない旨の連絡があり、平成29年度は、急遽断念することとなった。また、今後の実施についても鳥インフルエンザや豚コレラなどの問題から衛生面や防疫面などを考慮し、外部の利用を規制するとのことであった。

農場探検をはじめた三つの目的の一つ「農場の活用」を失うことで、学生達との講座は終了するかと思えたが、11年目の講座は、姿を変えて実施した。2018年（平成30年）6月24日に学生達から農場が使えなくても講座は続けたいと声上がり、学生達と新しい講座の開発が始まった。農場からこども館に場所を移し、テーマを牛にしぼり農場の魅力を発信する内容で2019年（平成31年）3月10日「日大のお兄さんとお姉さんと一緒に牛乳を使った石けんを作ろう」を実施した。令和元年度の12年目についても、「作って分かる！農場のどうぶつたち」と題して2020年（令和2年）3月15日の実施に向け、現在、2019年（令和元年）9月12日から検討を進めている最中である。

おわりに

学生達とのつながりを持つことで、12年間講座を実施することができた。指定管理者制度の導入によって行事の内容やスケジュールが決まるなか、学生達の協力を得ることで、こども達が自ら学べる機会である「申込制ワークショップ」を維持、開催できた。学生生活の大きなイベントに配慮しなければ、学生達とともに企画を立てられなかった。筆者一人であれば、挫折したであろうことも、学生達の強いつながりによって支えられたことは言うまでもない。学生とのつながりは、筆者だけのつながりでなく、先に述べた例のようにこども館の運営に大きく関わり、かけがえのない財産になっている。この財産を今後も大切に運営を行っていきたく強く思っている。

最後になったが、この場を借りて支えていただいた多くの方々に心から感謝申し上げる。